

11 牛石遺跡

都留市厚原字牛石

遺跡の立地

遺跡は、富士山の湧水を源として山梨県東部を流れる桂川と、その支流である大幡川が合流する厚原地区字牛石の河岸段丘上に立地する。

この段丘は、13haにおよぶ面積を有し、富士北麓においてこれだけの平坦面を有する場所はあまりない。

遺跡に立つと、南西方向に、近くの山や

まの上にそびえる富士山が望めるが、東側を除いてぐるりと山に囲まれて眺望は閉鎖的なものとなっている。

遺跡の調査

遺跡の調査は、圃場整備事業に伴うものとして、昭和54年5月～8月（第1次調査）、昭和55年7月～9月（第2次調査）、昭和56年1月～3月（第3次調査）の3次にわたって実施した。

このうちで、縄文時代中期末葉の大環状配石遺構が検出されたのは第2次調査においてであった。第1次調査は、段丘の東半分を対象として実施し、奈良・平安時代の集落址を検出した。第2次調査では、西半分を対象として発掘調査を実施したところ、縄文時代中期末葉の環状配石遺構の存在が確認された。そのため、この環状配石遺構の全貌を明らかにすべく、第3次調査を実施した。そして、予想をはるかに上回る直径50mにおよぶ大環状配石遺構の発見に至ったのである。

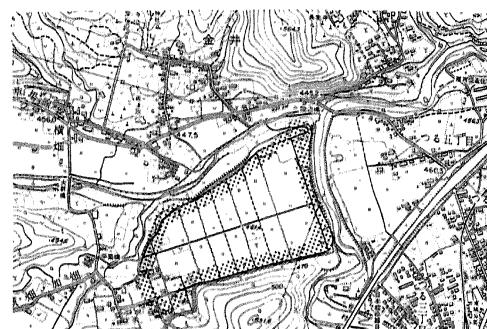
発掘調査は、日本大学考古学研究会並びに都留文科大学考古学研究会の応援を得て行った。



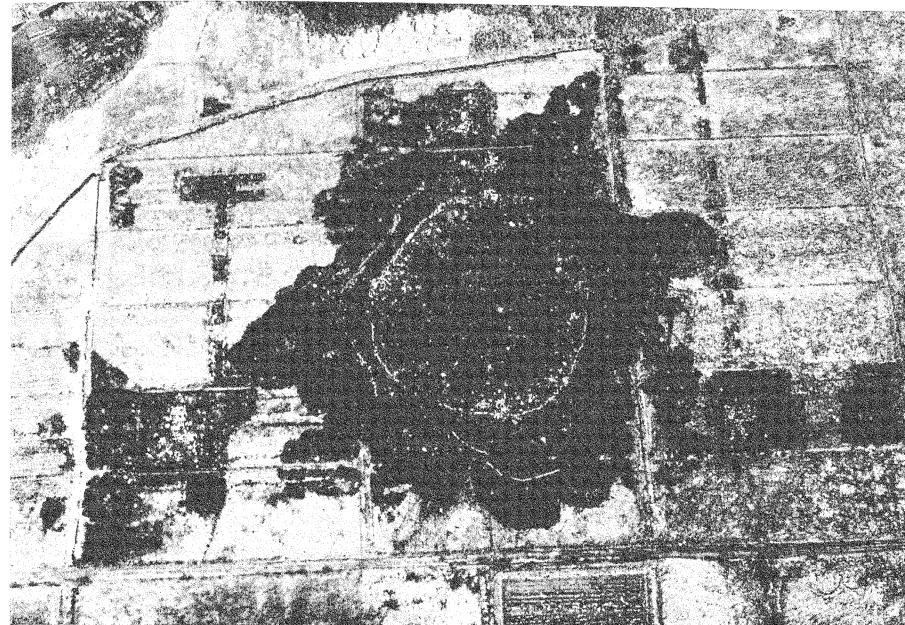
第2図 牛石遺跡遠景

遺 構

牛石遺跡で発見された配石遺構は、直径50mにおよぶ大環状配石遺構（第3配石区）を中心、東側（第1配石区）、北側（第2配石区）、西側（第5配石区）の各区で発見され、これらは出土土器より縄文時代中期末葉の所産であることが判明している。



第1図 遺跡の位置



第3図 牛石遺跡全景

第1配石区

本配石区では、20～30cm大の河原石による組石5基を中心に、柄鏡状を呈するかのように礫が散在していた。柄鏡状と表現した柄の部分、つまり張出し部において石棒の破片を用いた石壇状の施設が認められ、張出しの基部には埋設された加曾利E4式土器が検出された。この土器は胴下半が欠損したものであった。

散在する礫には河原石の他に溶岩が認められ、これらのなかに混じって、有頭石棒2点、磨製石斧8点が出土した。この第1配石区では、配石及びその周囲から曾利IV・V式・加曾利E4式土器や石鏃・磨製石斧・磨石などの石器類が多量に出土した。

第2配石区

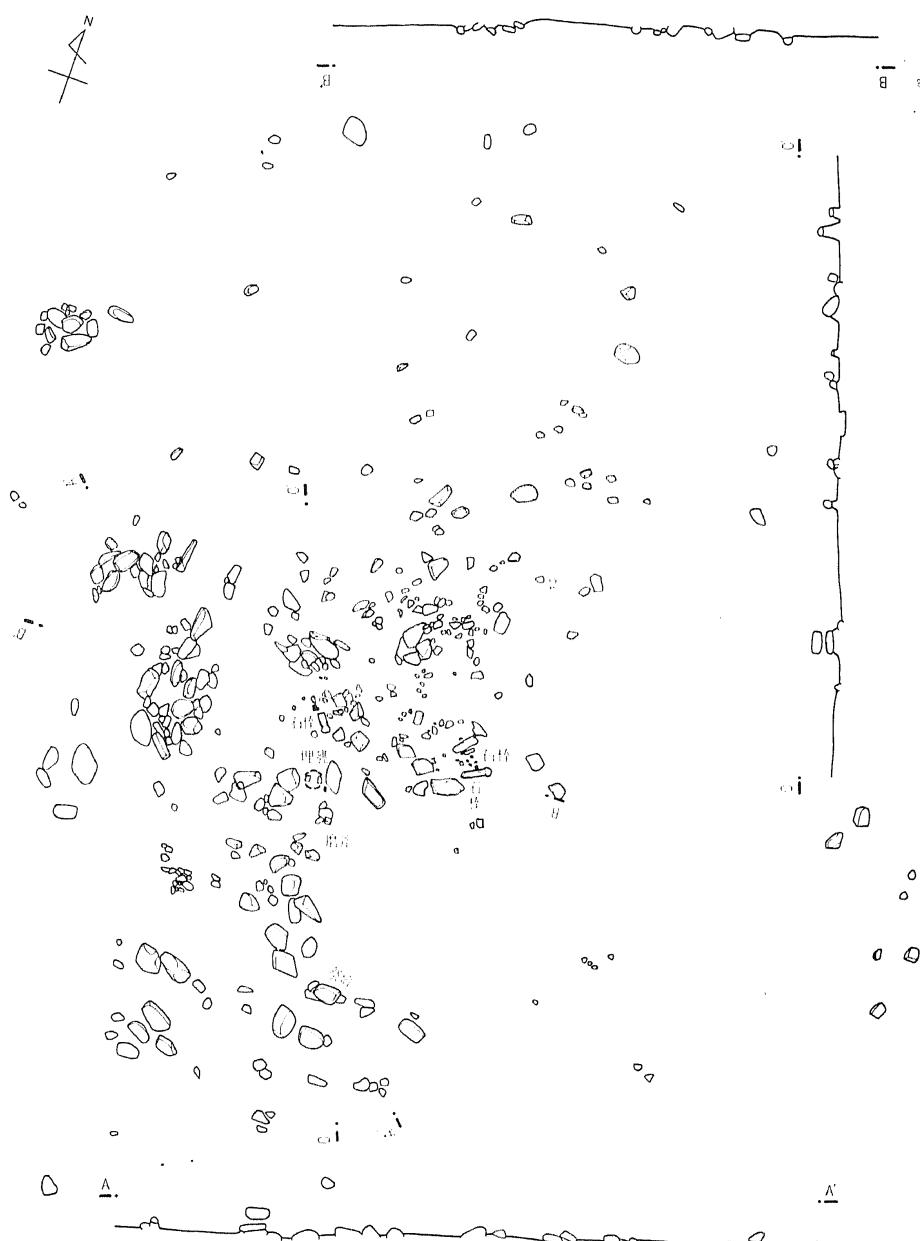
本調査区では、4～5mの規模を有する半月状の配石遺構（第1号配石遺構・第2号配石遺構）が2基検出された。また、本地區からは曾利V式土器の屋外埋甕が3基検出された。

第1号配石遺構

本調査区東側に位置し、20～40cm大の河原石によって直径約5.9mの半月状を呈するもので、配石面はかなりアップダウンがあった。この配石内から横倒しに潰れた加曾利E4式土器（第3埋設土器）が認められ、また石棒・磨石などが配石内から検出された。

第2号配石遺構

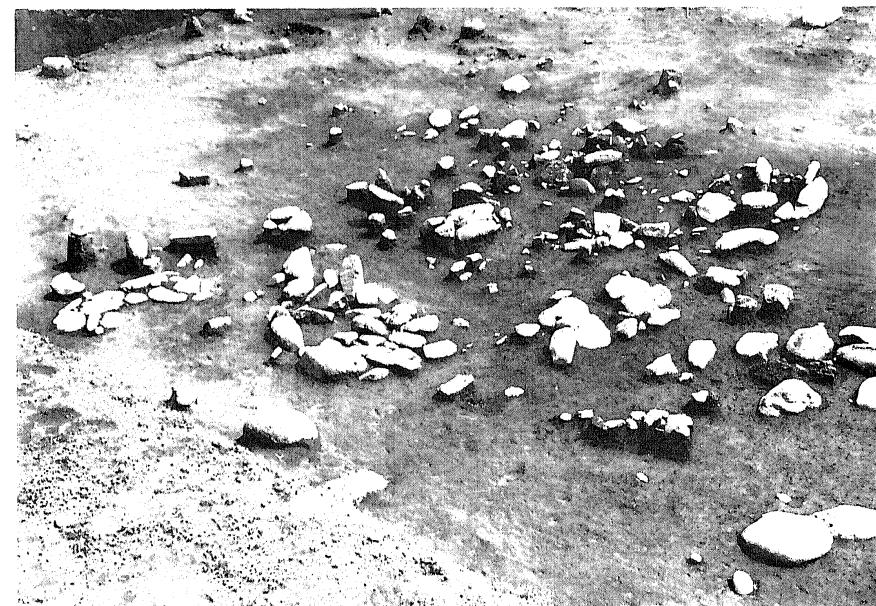
第1号配石遺構の東側で検出されたもので、第1号配石遺構ほど形は整っていないが、やはり半月状を呈するものと思われる。本配石遺構の配石の下から埋甕（第4埋設土器）が認められた。



第4図 第1配石区全体図



第5図 第1配石区全景



第6図 第1配石区



第7図 第2配石区全体図



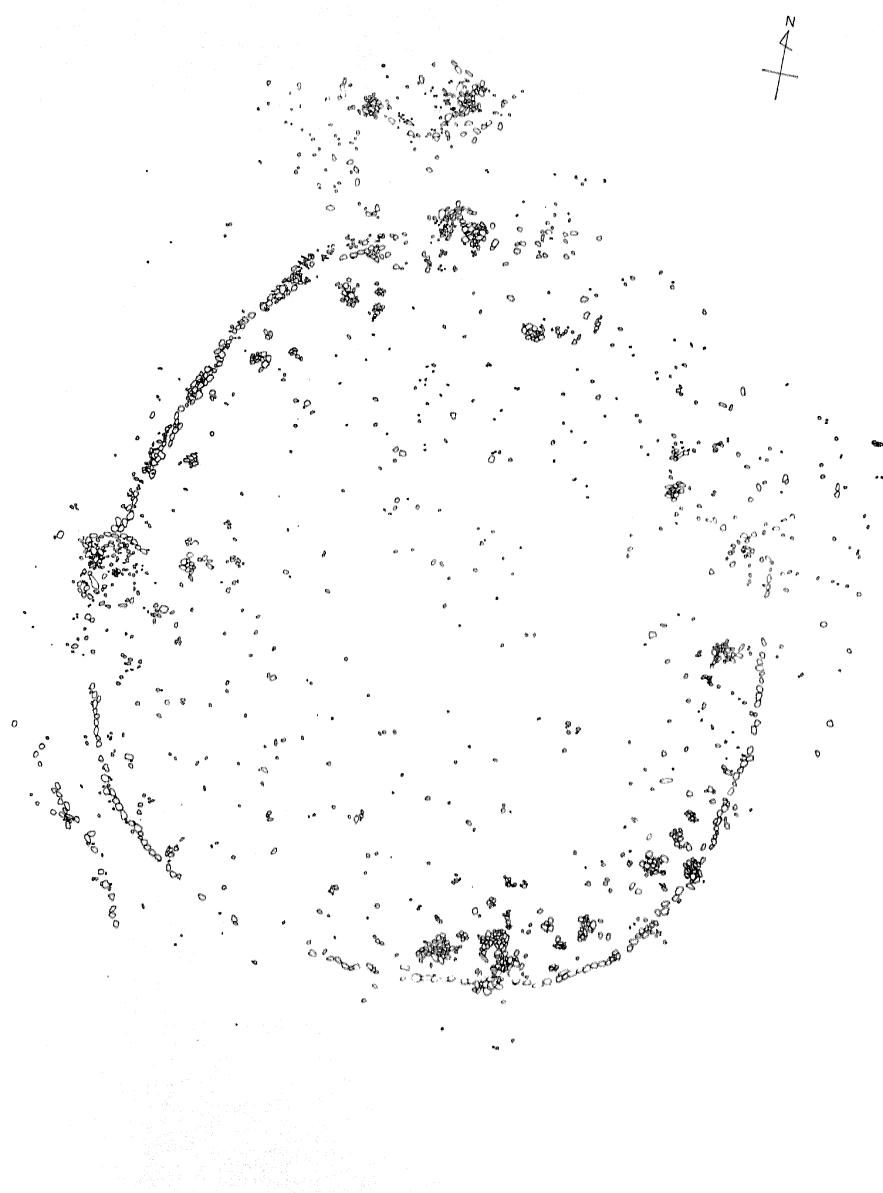
第8図 第2配石区全景



第9図 第2配石区



第10図 第3配石区



第11図 大環状配石遺構全体図